

# 第46回全国中学校バスケットボール大会を終えて

旭川市立愛宕中学校 堀口創平

## 【はじめに】

「いつかは全国大会に...」指導者であれば誰もが夢見る全国大会への出場。私もその夢をもつ一人でした。

過去に女子チームで2度全道大会に出場したことはありましたが、ベスト8どまり。心のどこかで全国出場は一部の限られた指導者だけに許されることで、自分は夢で終わってしまいそうだな...と思うことも。

そんな中、旭川の強豪愛宕へ異動し、偶然が重なってなぜか男子の指導者になり、そして初の全国大会に...

今回、チームとしても自身としても初の全国に臨むまでの苦闘の日々を稚拙な文章で申し訳ありませんが記させていただきます。

## 【入学から2年生夏まで】

私が異動した平成26年に入学した1年生は、ミニバス時代に優勝候補筆頭といわれながら、予選でライバルの苫小牧和光ミニバスにやぶれ、悔し涙を流したメンバーでした。その1年生の中でも特に群を抜いていたのが永原でした。入学時ですでに176cmで靴のサイズは30cm。肩幅が広く筋肉質でパワープレイやリバウンドでは3年生にも負けません。4月に行われた旭川地区の春季大会から即デビューし、見ている先生方の度肝を抜くようなプレイを披露しました（実はそれからほとんど身長が伸びていません）。

チームは長年のライバル、長谷川先生率いる緑が丘中に敗れましたが、勝てる可能性を十分感じる内容でした。その予感通り、その後に行われた旭川市中学校選手権では僅差で緑が丘を破り優勝。中体連旭川市内大会でも永原がリバウンドをがんばってくれるおかげで、3年生達が思い切りの良いシュートを打つことができ、緑が丘中に予想以上の差をつけて優勝し、中連全道旭川大会への出場権を得ることができました。

全道大会ではベスト4をかけた試合で帯広南町と対戦。4月に行われた北海道カップを見学に行って南町の試合を見ていたので、とにかく強力なインサイド2枚をまずはマンツーマンでしっかり守ることを指示し、永原を5番の曾根君につけました。しかしこれが大誤算。開始から曾根君をとめることができずに簡単に失点を重ね、前半で大差をつけられる展開に。後半はゾーンに変え、相手もたついている間にオフェンスもかみ合ってきて盛り返したものの、悔しい敗戦となってしまいました。スーパー1年生といえどもやはりトップレベルの3年生には格の違いを見せつけられてしまいました。

全道大会を終え、新チームが始まりました。スタメンのほとんどを1年生が占めるというメンバー構成で、オフェンスはオープンポストのアライメントでカッティング&パッシング主体。ディフェンスはトラップに行かないオールコートマンツーマンで戦うこととしました。それまでの愛宕は、「OFはがんばるけどDFはがんばらない」傾向にあったため、特に夏休み中はDFに力を入れました。

旭川地区の2度の新人戦では、公式戦ではありましたが、課題意識を持って集中して臨ませるために、決勝まで1ピリもしくは2ピリをノードリブルの制限をかけて戦いました。それでも前半をダブルスコアで終える試合がほとんどでした。一人一人のDFへの意識が高まったことと、どのチームもまだまだオフェンスが未熟な新人戦の時期に、ディナイを重視したディフェンスをしかけ、たまにシュートまで持ち込まれたとしてもディフェンスリバウンドをほぼ確保できていたからです。

しかし、さすがに決勝の緑が丘戦はそうはいきません。旭川地区ジュニアでは巨人阪神戦

に匹敵する伝統の一戦。どちらかというとなが丘への声援が大きく、愛宕はアウェイな感じ  
です。スタートのほとんどが1年生ということもあり、選手達はすぐにその雰囲気  
に飲まれます。そうすると普段では考えられないくらい慌てたり、ムキになっ  
て突っ込んでいたり、せっかくそれまでやってきたカッティング&パッシング  
主体のオフェンスが急に無理矢理ドリブル1対1のオフェンスになってしま  
います。また、なが丘の2年生はサイズがあり、それまで永原一人で確保  
していたディフェンスリバウンドがそう簡単に取れなくなるという弱点も  
露見します。結局この□すぐムキになり一人でやり出す、□永原一人でリ  
バウンドをとっている、という2点が後々までこのチームを苦しめること  
となりました。

その後の北大会では決勝で深川・妹背牛に負けて準優勝。年明けに小樽  
で行われた決勝大会では予選の日章戦で序盤全くいいところがなく、後半にや  
っとエンジンがかかって終盤に追いつき、残り1分を切って相手ボールを奪  
い、一気に逆転というところで痛恨のターンオーバー。そして最後にあっさ  
りと決められ1ゴール差で敗戦。涙を流す選手達に檄を飛ばし、続いて挑  
んだ東海第四戦も、格の違いを見せつけられ大敗し、結果1勝もできず  
に終了という本当に悔しい思いを味わいました。

実はこの決勝大会では、試合結果、バスケットのプレイ以上に考えさせ  
られたことがありました。それはこのチームにとって初めての遠征でしたが、  
ホテルでの過ごし方等でかなり生徒指導場面があったことです。それまで  
女子チームで何度も遠征に行っていましたが、事前にプリントを配布し、  
注意事項等を確認しておけば当日はほとんど何も起きませんでした。今  
回についてもミニバス時代にも遠征に行っているだろうと信頼（油断？）  
していたのが大きな間違いでした（笑）。

余談ですが、「良い選手の前に良い生徒であれ」的なことを多くの指導者  
は説くでしょうし、そこで選手達と戦うことは当然のこととして指導されて  
いると思います。私もそう思って指導してきました。部活動の目的も健全な  
人格の育成です。しかし、このチームを指導するようになって私の力量では  
「スルー」した方が良く、「流す」ことで上手くまわることがあることに  
気づかされました。

決勝大会で自分たちの未熟さを痛感したその後、冬休みの雪中練習を喜  
んでこなし、1年生の永原が北海道選抜に、ほかの主力メンバーも地区選  
抜に選んでいただき、貴重な経験を積み新たな学年を迎えました。

4月の春季大会では前述の頭に血が上ってムキになってしまう自滅パ  
ターンでなが丘に負け、ゴールデンウィーク中に行われた旭川でのトレー  
ニングマッチにおいて、永原が足首をねんざ。全治2ヶ月以上の重度で中  
連市内大会に間に合わないかもしれないとのこと。続いて行われた中  
学校選手権もなが丘に負け、いよいよ中体連。旭川地区は市内大会の  
後に上川管内代表決定戦があり、これに勝たなければ全道に出られませ  
ん。ですから、照準は代表決定戦の決勝戦とし、市内大会は永原のプレ  
イングタイムを少なめに戦いました。決勝はいつも通りなが丘でしたが、  
3年生の林稜斗が大活躍し、優勝して1位で代表決定戦へ。動けるよ  
うにはなったものの永原にはできるだけ無理をさせないようにして迎  
えた代表決定戦の決勝戦。相手は再びなが丘でした。警戒していたなが  
丘4番齊藤に、身長はやや劣るものの手が長く読みの上手い久保田を  
マッチアップさせましたが、これが効き、攻めては久保田、永原、近  
藤、そして3年生の林がおもしろいように点を重ね73-44というスコ  
アで無事全道への出場権を獲得しました。

小樽で行われた全道大会。初戦の相手はゴールデンウィークのトレー  
ニングマッチで実はコテンパンにやられていた北見小泉。そして勝ち進  
めば深川・妹背牛、東海第四と、決勝大会の敗戦以来、ずっと目標に  
してきたチームとの対戦を控えていました。にもかかわらず、なんと  
前日の夜の就寝時間を守らない、試合当日の朝に寝坊するという出来  
事が発生してしまいました（スルーできず大激怒）。

何とか気持ちを切り替え（私が）、臨んだ北見小泉戦。相手はピック  
&ロールと素早いパ

ッシングとを使い分けるバスケットの上手いチームでしたが、1ピリあたりの失点を15点以内、得点15点以上を合い言葉に、インサイドの優位性を生かした試合運びで勝利し、いよいよベスト4をかけた深川・妹背牛戦迎えました。

過去に練習試合も含めて4度ほど対戦していますが、一度も勝ったことはありませんでした。相手がどんなことをしてくるかはだいたい分かっていたのですが、とりあえず入りはマンツーマンで、ポイントポイントでハーフの1-2-2トラップゾーンを仕掛けることを指示しゲームが始まりました。序盤は高い集中力で優位に試合を進めましたが、途中で2年生ガードの林流輝が太ももの打撲で離脱。ここから一気に追いつかれ前半は33-35の2点リードで折り返し。後半は林が抜けた分マンツーマンでは守り切れない感じがしたのでゾーンに変更。一進一退でしたが何とか2点リードで残り40数秒という場面を迎え、バックコートから玉を運んで時間を使って...というところでまたもや痛恨のターンオーバー、奪われた勢いでそのままレイアップまで持って行かれなんとバスケットカウント。フリースローも決められ1点ビハインド。タイムアウトを取り、サイドからのスローインでしたが、逆サイドの2年生近藤がノーマークになりそこへ直接パスが...。いつも打つなと言っても打つ近藤でしたがそのときに限ってなぜか躊躇気味でシュートを打つも入らず。そのリバウンド争いで再びスローインでマイボールに。タイムアウトも無く、選手達に任せるも最後のシュートが入らず無念の惜敗。またもやベスト8の壁を破れずに終わってしまいました。

## 【2年生新チームから3年生上川管内代表決定戦まで】

2年連続で全道ベスト8の壁を破れずいよいよ自分たちの代に。目標を「全道優勝し全国の決勝トーナメント1回戦を勝つ」に設定して新チームがスタートしました。スタイルは前年度からそれほど変えることはありませんでしたが、DFがマンツーマンのみになるということでベースをハーフマンツーマンとし、変化としてはそこからウイング、あるいはコフィンコーナーへのトラップということにしました。

新人北大会予選で優勝し、11月末に旭川地区主催のチャレンジマッチを迎えましたが新人戦で永原が足首のねんざ、チャレンジマッチ中に4番林と5番近藤が同じく足を痛め、スタメン中3人が怪我をするという最悪の事態に。それでも久保田をガードにし、控えの選手達で何とか最終試合の清田戦を引き分けに持ち込んだのは収穫でした。

3人の怪我も何とか回復し、優勝を目標に乗り込んだ北見での北大会。危なげなく最終日に残り、迎えた準決勝は帯広西陵が相手でした。事前に帯広地区の決勝戦の動画を見ていましたが、メンバー構成のバランスが良く、破壊力のあるOFと読みの優れたDFで画面越しにも相当強いだろうなと感じさせるチームでした。

序盤はお互いマンツーマンで愛宕がやや押し気味に試合を進めましたが、西陵5番の佐々木君のファールが増え、そこからゾーンに変化したことで徐々に西陵に流れが傾き出しました。ゾーンアタックについて実はそれほど練習していませんでしたが、オーバーロードでの攻め方については何度かやっていたので、それを指示したのですが、やはり練習不足もあって全く機能しませんでした。前半を4点リードで終えていたのが、3ピリ終わって逆に5点ビハインド。ピリオド間はDFをオールコートマンツーマンで、OFは形にこだわらずにフリーで攻めろという指示でした。4ピリが始まり、ようやくいつものリズムを取り戻し、何とか残り4分で1ゴール差まで詰め、残り3分で永原のスティールからの得点で39-39の同点。「よし、このまま逆転」と思いきや大事なところで失点、そして永原がOFリバウンドを何度も取るもシュートが決まらず逆に速攻を出され、結局そこから1点も取れず47-39で試合終了。悔しい敗戦となりました。

敗因はゾーンで崩されたリズムを取り戻すのに時間がかかりすぎたことと、それまでOF、DFの両面で圧倒的に勝っていた永原と互角に渡り合える佐々木君の存在が大きかったように思います。そして、あまり言いたくは無いのですが普段の練習に臨む姿勢に部員間の温度差があり、どこかチームが一体となっていない感じがありました。現にこの大会期間中にも部員同士がけんかをするなどバスケット以外の面での指導が相変わらず多い状態でした。

それでも決戦大会の出場権は得たので、西陵リベンジすることを目標に残された少ない練

習を厳しく行いました。さすがに負けた後だけに集中して臨むことができました。

迎えた決勝大会の初戦。相手は南大会2位の札幌向陵。序盤は久々のゲームということもあり1ピリ8点、2ピリ11点と全く点数が伸びません。また、普段は自分たちが仕掛けるハーフコートでのトラップDFにまんまと引っかかり、前半を19-25の6点ビハインドで終えました。後半はDFの圧力を強め、所々でコフィンコーナートラップを仕掛けること、OFはやはり永原のインサイドを起点に攻めるよう指示。ようやくいつも通りのリズムになり終わってみれば後半は39-18、トータル58-43で初戦を勝つことができました。

続いて予選トーナメント2回戦は北大会優勝チームの北見小泉。夏の全道で対戦して勝っているため精神的に有利な状態で臨むことができ、具体的には小泉がよく使うピック&ロールの守り方と、4番菊池君のシュートに注意するよう指示。インサイドに絶対的優位性があったので危なげなく70-50で勝利。予選トーナメント1位で決勝トーナメントへ。

決勝トーナメント1回戦は旭川のチャレンジマッチで敗れた恵庭恵明。個々のファンダメンタルレベルが高いこなれたチームです。特に4番浜本君のシュートは入り出すと止まらないの注意するよう指示してゲーム開始。その浜本君のシュートが落ちてくれたおかげで終始優位に試合を進めていましたが、途中から8番和田の身長が低いことから、そこをポストアップされてやられてしまうことが目立つようになってきました。そこで普段、永原のバックアップセンターとしてそれほど出番の無かった9番佐藤を起用。とにかくDFとリバウンドをがんばるように指示したところしっかりその役割を果たし、終盤浜本君の連続3Pで追い上げられるものの、63-55で逃げ切ることができました。

決勝の相手はやはり帯広西陵。序盤は簡単にシュートを打たせたり、リバウンドを永原一人に任せきりにするなどDFもリバウンドも今一つ。OFはポストアップしても球を入れてもらえない永原と、永原がポストアップしているおかげで1対1ができない久保田の両方がイライラ状態で、非常に嫌な雰囲気なまま11-17の6点ビハインドで1ピリを終える。何とかDFとリバウンドからゲームを立て直すことと、ポストに入らなければ逆サイドに飛ばしてそこから1対1を仕掛けるよう指示するもののOFはなかなか調子が上がりず前半を18-26の8点ビハインドで終えることに。

後半になり、過去にもこういう状態を打開してきた切り込み隊長5番近藤の1対1が徐々に相手を破りだし、ようやく愛宕に流れがくる。3点差まで詰めて3ピリ終了。4ピリも一進一退の攻防が続く。懸念材料であった8番和田のDFとリバウンドの弱さが大事なところで目立ってきたため、1年生の赤坂を起用。ノーマークシュートを2本決めるなどするが、やはりDF面で11番の佐藤君を止められず残り45秒で47-50の3点ビハインドでタイムアウト。恵庭恵明戦でも3Pを決めていた久保田に3Pを打たせるスローインプレイを指示。なんとこれを久保田が見事に実行し50-50の同点に。残り38秒。相手もすかさずタイムアウト。とにかく守り切って後はシュートするだけという指示で送り出すが、なんとぽっかりゴール下にノーマークができ「あ〜やられた」と天を仰いだ瞬間、どこからか永原が飛んできて会心のブロックショット。そのこぼれ球を近藤が持ち込み、永原に渡すかと思いきやなんとそのままブザービートを狙った3Pを打つ。そのシュートは入らなかったがなんとファールの笛。与えられたフリースロー3本のうち2本を決め、見事初優勝を飾ることができました。

この「全道優勝」という結果がチームに良い影響を与えることを望みましたが、思ったほどでは無く、相変わらず練習に真剣に望む者達とそうでない者達との差が私を悩ませ続けました。どれだけ言っても変わらない選手とぶつかることも数多くあり、校内人事で「男バスの顧問降ろしてもらえませんか？」と半分冗談半分本気で校長先生に言ったこともありました(笑)。

年度が変わり、いよいよ3年生となりました。新1年生で即戦力の鹿原が加わり、益々メンバーが充実しました。

4月はじめに函館で開催された北海道カップに出場しました。目下日本一といわれる新潟の石山中学校との対戦では、相手が移動の関係で試合開始30分前に到着し、アップもままならない状態だったにもかかわらず、試合開始から怒濤のごとく攻め込まれあっという間に0-10にされてしまいました。タイムアウト後ようやく点数を取ることができたものの、

1ピリを8—21と格の違いを見せつけられてしまいました。個々の力はもちろんのこと、チームとしてスパイラルオフェンスのシステムをしっかりと行ってくるので、その対応にも苦労させられました。しかし、試合が進むにつれ、徐々にハンドオフへの対応やスクリーンの対応にも慣れてきて、やっとゲームが成り立つようになってきました。こちらのOFでは永原の1対1からのジャンプシュートがおもしろいように決まり、どこどころで久保田が点を取るなど、個人技での戦いになってしまいましたが、通用しているという手応えを感じさせました。結果は途中相手メンバーが下がったこともあり50—68と道内勢では最小の点差で終えることになりました。その後の福井明道戦は快勝したのですが、翌日の帯広西陵戦で久保田が腕を負傷し、敗戦、続く恵庭恵明戦では永原がまたもやねんざをして敗戦と、悪夢のような1日となってしまいました。

ゴールデンウィークに旭川で行われたトレーニングマッチでは、永原の怪我が回復していなかったため、1年生の鹿原をメンバーに加え、愛宕のプレーに慣れさせることに目的を置き、成果を上げることができました。そして、いよいよ中体連市内大会、上川管内代表決定戦を迎えました。

管内決定戦の準決勝ではジュニア連盟審判委員長の田中充先生率いる、ミニバス経験者のいない名寄中学校との対戦になりました。ミニバス経験者なしで、旭川3位の広陵中学校を破って勝ち上がったばかりで、予想以上の苦戦を強いられました。また、決勝の緑が丘戦でも、最後の最後まで粘り強く戦う相手に対し、気の抜けたようなプレーが時折見られる低調な戦いぶり。試合には勝ったものの、この両チームの最後まであきらめない戦いぶりに、はたして自チームは部活動の目的を達成できているのだろうか？と改めて考えさせられました。自然と大会終了後の選手達への言葉は厳しい内容が多くなってしまいました。

## 【全道大会そして全国大会へ】

全道大会の組み合わせは新人決戦大会の結果が反映されるということで、恵庭恵明、帯広西陵とは決勝まで対戦することは無く、準決勝で北見小泉との戦いがあることが分かっていました。ですが、その前に札幌市内のチームのいくつかと対戦しなければならないことに強い警戒感をもっていました。特に大きなセンターのいる札幌向陵と、過去に一度も対戦したことのない札幌啓明とは戦いたくないなと思っていました。ところが、啓明が市内大会で敗戦するという情報を耳にし、正直ホッとしたのと同時に改めて中連の怖さを感じさせられました。

初戦は札幌北陽でした。何となくゲームの入りの動きや判断が遅く感じ、かなり檄を飛ばしましたが選手達はあまり聞いてるようでも無く、自分だけがただ焦りを感じていたのかもかもしれないと今は思えます。スチールやDFリバウンドから速攻が何本か出たところで差が広がっていき、全員出場で勝利。続く登別緑陽戦では、4番の1対1をなかなか止めることができず、さらに永原がOFチャージングを連続で取られ、早々に3ファールに。シュート感がなかなかつかめない久保田も打てども入らずで、1ピリを16—18のビハインドで終えるという緊急事態に。しかし、2ピリから4番に1年生の鹿原をフェイスガードでつかせ、ようやく相手の得点が止まりこちらのペースに。後半に永原を戻し、試合を決めることができました。しかし、アップの時のから非常に気迫のこもった声を出し、同じく気迫あふれるプレイで最後まで戦う緑陽の姿にまたも勉強させられました。

準決勝の相手は予想通り北見小泉。とにかく4番の菊池君にシュートを打たせるなという指示で、選手もその通り懸命に守ったのですが、さすがにタフショットを決めてきます。しかし、粘り強く守った成果が現れ、2ピリから徐々に菊池君のシュートが落ちだしてきた頃からOFの調子も上がり、最後はスタメンを休ませるほどの点差となり72—47で全国を決めることができました。うれしさというよりまずは最低限の結果を残したという安堵感が強かったです。

別室で全国大会に関わる説明を帯広西陵の坂田先生と受け、決勝での健闘を互いに誓い合い、北大会から数えて4度目の対戦の場に臨みました。

前の試合である女子決勝戦が札幌勢同士の熱戦で、しかも清田の逆転勝ちということで会

場全体が熱気を帯びていたはずなのに、男子の決勝が始まった途端、やけにシーンとなっていたのを今でも思い出します。後日放映されたテレビ放送も、男子の決勝になったとたんに視聴率が下がったとか。

それはさておき、序盤は永原の1対1からのミドルシュートがズバズバ決まり、OFは悪くありませんでしたが、DFはやはり8番和田のところ何度かやられます。そこで1ピリ途中から鹿原を投入。ここから鹿原の活躍でじわじわと差を広げていき、前半を31-24の7点リードで終えることができました。とにかくしっかり守ってリバウンドさえ取れていれば大丈夫ということで後半を送り出しますが、やはりそう簡単にはいかないのが試合です。過去の全道大会でも必ず試合中の怪我でコートに立つことができなくなっていた4番ガードの林が、3ピリ開始早々に足をつってしまい、そこから崩れ出します。8番の和田や2年生の佐々木を投入し、何とか凌いでいると今度は久保田がファールトラブル。スタメン2人が欠けたことで一気に差を縮められ、4番林を戻すも4ピリ残り6分で逆転を許す。さらに久保田もコートに戻すもそこから1ゴール決められ4点ビハインドを追いかけることに。このあと近藤が決めるも決め返され、なかなか4点差が縮まらない。残り1分35秒でセットオフエンスから永原が相手のファールをもらいフリースローを2本とも沈め2点差に。さらに久保田が速攻からのレイアップを決め同点。そして、さらに残り40秒で4番林が一瞬のマークのズレについてレイアップを決め逆転に成功。この後も鹿原と近藤がそれぞれフリースローを1本ずつ決め、59-55で全道優勝を勝ち取ったのでした。実に旭川勢としては23年ぶり、そして愛宕中男子は初の全道優勝です。

全国大会出場を決めてからは、その手続きとどういう調整をしていけばいいのかに苦労し、失敗もありました。

手続きの面では、開会式の前日に福井入りをする予定を組み、大会主催者が用意してくれた希望練習会場の申し込みFAX用紙を送信したつもりになっていました。が、実際は送信しておらず、大会数日前に届いた希望練習割り当て表に愛宕の名前がありません。一気に血の気が引き、どうしたらいいかを北海道中連専門委員で同じ旭教出身の野崎先生に相談しました。すると「なんとかできるよ」という救いの声をいただき、本当に助かりました。ありがとうございました。

対戦相手が関東3位の宇都宮市立鬼怒中学校、九州2位の熊本市立東町中学校と決まっていたのは、関東大会や九州大会の試合動画をy o u t u b eで見ってみました。すごい時代になったものです。

鬼怒中学校には昨年のトップエンデバーに参加し、現U-16候補のスーパーエース188cmの星川君がおり、関東大会の準決勝では関東1位の梅丘中相手に43点を取っています。同じくトップエンデバーに参加した永原は「先生、あいつはすごいです。はっきり言って止める自信がありません」という弱気な発言をします。「わかった。序盤は鹿原にフェイスガードで付かせるから大丈夫だ。でもそれでダメならお前についてもらうからな」と言って安心させました（笑）。

東町中についても九州大会の決勝戦、対西福岡中戦を見たのですが、西福岡中が圧倒している試合だったので、正直言って「なんかかなりそうだな」という感想をもってしまいました。後から気づかされるのですが、この認識が大きな間違いでした。

全国大会までの練習はそれほど量を落とすことも無く、いつも通りに行いました。最後にゲームを行ったのが8月11日（木）に旭大高とで、その後、13日（土）～15日（月）とお盆休みを取り、16日（火）、17日（水）、19日（金）、20日（土）と練習し、21日（日）に出発、22日（月）は公開練習と開会式で、23日（火）に予選リーグというスケジュールでした。今思うと13日（土）か14日（日）にも高校生とのゲームをしておくべきだったと思います。

それ以外にも全国ならではの道内大会や道内遠征では経験できないことがいくつかありました。

一つは飛行機移動と飛行機の乗り継ぎです。旭川空港から羽田、そして羽田から小松へと乗り継いだのですが、最初の旭川空港での手荷物検査で、筆入れの中にカッターやなぜか彫

刻刀を入れていた生徒が数名おり、それらを見送りの家族に渡すのに一苦労したというアクシデントがありました。また、乗り継ぎまでの30分間で、選手達に各自で昼食を買いに行かせたのですが、搭乗口の近くの売店で買えばいいものを、わざわざよりおいしそうなのを求めて羽田空港の奥地へと行き、出発時間ぎりぎりになっても半分近くの選手が搭乗口に現れず、放送をかけてもらおうか迷っていたところに買い物袋をもった選手達が走ってきて…。ただでさえ暑いのに、余計に血管が拡張して小松行きの飛行機に乗り込みました。

二つめは宿が選手16名の大部屋だったことです。道内では過去に一度もありませんでした。一応部屋にエアコンはついていましたが選手達の部屋に行くたびに16人分のむせかえるような空気を感じ、「指導者は個室で良かった」と心から思いました。

三つめは西福岡中と同宿でしたが、全国常連校は保護者も同宿し、食事と一緒に食べ、洗濯等の身の回りの世話を一手に引き受けているということです。その保護者の人数も相当な人数で、こういった点でも日本一を狙うチームと初めて全国に出た私たちとの大きな差を感じざるを得ませんでした。

四つめは、全国大会の第1試合のアップは開始30分前にならないとコートを使えないという点です。道内大会だと9時開始の第1試合の場合、1時間前の8時からフロアが使えます。当然そのつもりで乗り込んだのですが、そうではありませんでした。プログラムにも特に書いていなかったのでもちょっとびっくりでした。さらに道内では開始10分前までは自チームベンチの前でアップし、10分を切ってから前半に攻めるコートでアップするのが慣例となっています。しかし、全国では最初から前半に攻めるコートでアップをしているチームばかりで、いつも通り自チーム側にいると相手コーチに「向こうでやってもらえませんか」と言われ、ちょっとムッとしてしまったのですが、隣のコートもそうしているので「北海道ルールだったのか」と、ムッとしてしまった自分を恥じました。

会場はあわら市のトリムパーク金津でしたが、体育館フロアはエアコンが効いていますが、それ以外の場所はエアコンが効いておらず、アップはそのエアコンの効いていない高温の場所で行うこととなります。かといって外も日差しが強く、選手達にはきつかったと思います。

さて、肝心の初戦。相手は鬼怒中学校でしたが、予定通り相手エース5番の星川君には1年生の鹿原をフェイスガードで、あとは身長でマッチアップさせることとしました。開始直後にいきなり5番の星川君にミドルドライブで得点されます。こちらも5番近藤、6番永原の1対1でフリースローをもらいますが、フィールドゴールがなかなか決まりません。特に7番の久保田は全道大会からシュート感覚を狂わせていましたが、その後の練習でも復調せず、この試合も打てども打てども入りません。全くOFリズムができない中、相手もトラベリングをよく取られるなどまいちかみ合っていません。しかし、そんなもやもやした時間に決めてくるのがエース星川君。1ピリ終盤に「鹿原もたせるな」といっても簡単にもらって簡単に決めてきます。結局星川君に連続得点を許し、このピリオド7-15と8点ビハインドの苦しい立ち上がりです。ピリオド間に鹿原には荷が重いので永原がマッチアップすることと、オフェンスは入っていないならリバウンドを取りに行くしか無いことと、永原にゴールに近い場所でボールに触らせること、オフボールのカッティングをしっかりと行うことを指示し送り出しました。2ピリはDFでは少し止められるようになってきたのですが、相変わらずOFが全くだめで、全道大会ではおもしろいように決まっていた永原のミドルシュートもなかなか入らず、とうとう11-25の14点差に。ここで2回目のタイムアウト。指示の内容は先ほどとほぼ同じで、それをあきらめずにやり続けるしかないと言い送り出します。その後は何とか得点が伸びていき、前半終了時点で21-29と8点差変わらず。ハーフタイムでは審判がファールを結構取ってくれているので思い切りよく1対1を仕掛けること、特にシュートの入っていない久保田にはドライブとそこからのアシストなど自分のやれることをやるように言い聞かせました。

3ピリ開始後、ようやく本来の動きが出てきて5番近藤、6番永原の連続得点などで28-31の3点差まで詰めます。それからは一進一退の攻防が続き、このピリオドを38-41の3点ビハインドで終わりました。雰囲気的には愛宕の追い上げムードで4ピリ開始。ところが、星川君が要所で点数を重ね残り5分で39-47と再び離されかけたところでタイム

アウト。再開後、1年生鹿原のゴール下、永原のパワープレイそして5番近藤のバスケットカウントで一気に差を縮めます。愛宕に流れが来てそのまま逆転か？というところでまたしても星川君のポストプレイで永原がやられ得点されます。このプレイを見た瞬間パスサーについていた近藤になぜダブルチームに行かないのかと怒鳴ったのですが聞こえていない様子。タイムを取って指示するかも考えましたが、この時点で3分以上。すでに1回タイムアウトを取っていたので終盤の競り合いを予想したのと、選手達が気づいて止めてくれると予想し残しておくことに。しかし、この判断が仇となり、結局この後さらに連続で星川に点を取られたまらずタイムアウト。しかし時遅しで50-57で敗戦となってしまいました。

出だしの悪さを何とか挽回し、自分たちの流れをつかんで追いつき、さらに追い越せそうに捕らえきれなかった...その原因は相手エースに対してのDFの指示が曖昧になってしまったことです。特に終盤にタイムを取って指示をしておけばよかったという部分が悔やまれます。残したことが全く意味のないものになってしまいました。

何とか気持ちを切り替え次の東町戦に挑むよう選手達に話し、鬼怒中と東町中の試合を観戦しました。予想では鬼怒中が勝つものと思っていましたが、結果として東町中が3点差で勝利することに。この時点で愛宕が決勝トーナメントに進出するためには8点差以上をつけて東町中に勝たなければならないということが分かり、一段と気合いを入れて臨みました。

序盤はその気迫がプレイに現れ、簡単に3連続得点。幸先の良いスタートを切ったかに見えました。相手は4番の脇君がオールラウンダー、11番清成君がガードでスピードのあるドライブを武器とし、14番の180cmのセンター内尾君が非常に器用に動くプレーヤーで、OFはほぼこの3人による1対1または2対2もしくは3対3で、ほかの2人は徹底的にOFリバウンドに飛び込んでくるという役割がはっきりしたチームでした。その11番清成君に5番の近藤がマッチアップしたのですが、単純なドライブがなかなか止められません。あっという間に追いつかれ10-10となったところでタイムを取りました。ベンチに戻ってきた選手達は非常に疲れた様子でぐったりしています。出だして飛ばしたことで、相手の速い速攻に一生懸命戻ったことで息が上がっていました。7番久保田(178cm)にマッチアップしていた相手10番の石掛君が165cmということで、そのミスマッチをポストアップで攻めることを指示しましたが、「フェイスガードされてるんですよ」と嫌がっていました。ここにきてそういうことを言うのかも思いましたがぐっとこらえます。その後も相手の4番、11番、14番に分かっていてもやられてしまい1ピリを15-16で終えます。

2ピリ開始直後、久保田がドライブで点数を取り逆転。その後も18番鹿原、6番永原が得点し、21-16と5点リードします。しかし、ここから東町の4番、11番、14番のピック&ロールやドライブで得点を取られます。愛宕もなんとか得点を重ね、27-27の同点で2ピリを終了しました。

3ピリ開始、東町は14番の連続シュートで27-31と突き放しにかかります。愛宕は4番林の3Pで食いさがるものの、東町3人のピック&ロール、ペネトレイト、インサイドと多彩な攻撃を止められません。9点差に開いたところでタイムアウトを取りましたが、その後もペースは戻らず、徐々にプレイが雑になり、相手にブレイクも出されてしまいます。たまたま後半2回目のタイムアウトかとも思いましたが、残り時間がわずかだったため、我慢することに。結局このピリオドだけで見ると15-27。トータル42-54と12点ビハインド。

4ピリ開始後、東町4番、11番の得点で42-58とリードを広げられます。しかし愛宕も6番永原の連続得点で46-58に。ここで東町がタイムアウト。しかしその後も永原、近藤の連続得点で50-58と8点差に詰め寄りました。しかし、ここまでが精一杯。結局55-67で敗戦し予選リーグ突破の目標を叶えられませんでした。

敗因は、相手の3人のOFを分かっているにもかかわらず止められなかったことに尽きますが、実はほかの2人にOFリバウンドを徹底して飛び込まれたことにもかなりのダメージを与えられました。また、マンツーマンDF推進の影響も少なからずありました。残りの2人にマッチアップしている選手のビジョンが3人に集中したり、ヘルプに寄りすぎたりするとすぐに黄色旗が振られ、警告されます。その警告はタイムアウト中にされるため、本来こちらが伝えた



い話の前にそのDFポジションの話を選手達にしなければならず、非常にやりづらさを感じました。そして、やはり暑さによるバテもありました。終盤永原などは足がつって動けなくなりましたが、火の国熊本選手はまだまだ動けそうでした。

こうして、目標であった決勝トーナメント進出はならず、悔しい全国大会となってしまいました。同じ北海道代表の帯広西陵のがんばりを見られたことや、残りの日程でスーパー中学生「横地聖真」率いる岩成台が新潟石山、東京梅丘、そして西福岡という優勝候補を次々と倒していく試合を見学できたことは、選手達にとって一生の思い出になったことと思います。

## 【おわりに】

この3年間、日々様々な葛藤があり本当に苦しみました。しかし、あの全国場に私を立たせてくれたのはまぎれもなく選手達であり、彼らのおかげで私自身が指導者としてステップアップさせてもらいました。そのことに心の底から感謝しています。

今、改めて振り返り、予選リーグを突破できなかった原因は何か？と考えると自分では「チームDFの訓練不足」が最大の要因だと思っています。日頃よりDFを大事に考えてはいましたが、「自分のマークマンは自分で守り、無駄にヘルプをしない。」という考えの元、個々のDF力向上を重点に練習していました。結果、道内でのほとんどの試合ではそれで通用していましたが、逆にそのせいで（やっていないわけではなかったのですが）、ヘルプの意識が低くなってしまい、全国に出て、一人では守りきれない選手が出てきたときに対応できなかったのだと思います。

最後に、旭川地区のライバルとして様々なアドバイスをしてくださった長谷川先生、豊富な全国大会の経験からアドバイスをくださった高島先生、そして地区ジュニアの先生方、練習相手をしてくださった旭川工業高校前野先生、永嶺高校日下部先生、旭大高五十嵐コーチ、全国で練習会場の確保をくださった道ジュニアの野崎先生、道選で選手をご指導くださった山田秀剛先生、山田明先生、そして大舞台での戦い方のアドバイスをいただいた高橋和也先生...と数え上げればきりが無いほど多くの方々に支えられました。そのすべての方々に深く感謝を申し上げ、報告の結びとさせていただきます。

ありがとうございました。